

カラミティ

CALAMITY

une enfance de Martha Jane Cannary



© 2020 MAYBE MOVIES - NORLUM - 2 MINUTES - FRANCE 3 CINÉMA

REGIEUR: SALOME BOUVEN, ALEXANDRA LAAY, ALEXIS TOMASSIAN, JOCHEN HASELE, LEONARD LOUF, SANTIAGO BARBAN, DANIKEN WITTEKA, BIANCA TOMASSIAN, VIOLETTE SAMAMA, LEVINNAI SOLOMON, DELIA REIS - MAX BRUNNER
PRODUCTION: RÉMI CHAYÉ, HENRI MASALON & CLARE LA COMBE, CLAUIS TOKSVIG KJÆR & FREDERIK VILDMANSEN, JEAN-ARCHEL SPINER & EMMANUEL DELEPANG, SANDRA TOSSELLO, FABRICE DE COSTA & RÉMI CHAYÉ, FLORENCIA DI CONCILO, ANATOS WALLARÉ, LUANE CHOI HAN, BENJAMIN MASSOUBRE, EDJUNE NIEL & PATRICE SIAU, BENJAMIN MASSOUBRE, CÉLINE BONTE
DISTRIBUTION: AUBANE FILLON, RÉGIS DIEBOLD, MATTHEW ZERBAGEN & ANNECIC DUPAS, EDJUNE NIEL & PATRICE SIAU, LUANE CHOI HAN, MARC KONINGS, FANDU LEFFEVRE, MAYBE MOVIES, NORLUM, 2 MINUTES, FRANCE 3 CINÉMA & 220 MUSIC, FRANCE TÉLÉVISIONS, CANAL+ CINÉ+, UNIVERSAL PICTURES VIDEO, ANGEL FILMS & DR, DANISH BROADCASTING CORPORATION, CENTRE NATIONAL DU CINÉMA
ET DE L'IMAGE ANIMÉE & DANISH FILM INSTITUTE, EURIMAGES, RÉGION ÎLE-DE-FRANCE, RÉGION NOUVELLE-AQUITAINE, STRASBOURG EUROMETROPOLE, CNC, PÔLE IMAGE MARCHÉS, DÉPARTEMENT DE LA CHARENTE, PROCUREP, ANGOA, SAGEM & WEST DANISH FILM FUND, CINÉIMAGE RI, COPIFINA IS, INDEFILMS 7, CINÉVENTURE 4, SS IMAGE 2017, GEFEXA FILMS, INDE SALES COMPANY
nerlum 2minutes 3cinéma [CINEMA] [FRANCE] CANAL+ france-tv CINE+ UNIVISUAL [FRANCE] CHARENTÉ Strasbourg Cinéma INDEFILMS [FRANCE] SS IMAGE 2017 PIELA [FRANCE] ANGOA [FRANCE] PROCUREP ANGOA [FRANCE] GEFEXA [FRANCE] INDE SALES COMPANY

calamity.info @calamity_movie

カラミティ CALAMITY

une enfance de Martha Jane Cannary

アヌシー国際アニメーション映画祭 2020

長篇部門クリスタル賞

富川国際アニメーション映画祭 2020

審査員賞 / 音楽賞

原題：Calamity, une enfance de Martha Jane Cannary
英語題名：Calamity, a childhood of Martha Jane Cannary
監督：レミ・シャイエ
プロデューサー：アンリ・マガロン / クラリー・ラ・コンベ
音楽：フロレンシア・ディ・コンシリオ
制作スタジオ Maybe Movies (フランス) / nØrlum (デンマーク)
製作費：8百万ユーロ(9億6千万円)

2020年 | フランス・デンマーク | フランス語・日本語字幕 | 日本語吹替え |
DCP | カラー | シネスコ | 82分



アヌシー国際アニメーション映画祭

アヌシー国際アニメーション映画祭は、1960年にカンヌ国際映画祭からアニメーション部門を独立して創設された、世界最大規模にして最も長い歴史を持つアニメーション映画祭です。

日本の作品としては、1993年に宮崎駿監督『紅の豚』、1995年に高畑勲監督『平成狸合戦ぽんぽこ』がそれぞれ長編部門グランプリを受賞しています。また2017年には湯浅政明監督『夜明けを告げるルーのうた』が長編部門クリスタル賞を受賞しています。

※近年、グランプリ名称がクリスタル賞に変更されました。

INTRODUCTION

アヌシー国際アニメーション映画祭 クリスタル賞(グランプリ)受賞作品。

『カラミティ』は2019年ようやく日本公開され、その輪郭線のない美しいビジュアルと、ハードなストーリー展開で話題を集めたフランス・デンマーク共同制作アニメーション『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』のレミ・シャイエ監督による最新作です。2020年春に完成した本作は、アヌシー国際アニメーション映画祭にてワールド・プレミア上映され、見事クリスタル賞(グランプリ)を受賞しています。各国映画祭を巡回した後、昨年12月に本国フランスで公開されま

した。残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響で500館の予定を半減しての公開となりましたが、個性的な映像表現には更に磨きがかかり、よりエンタティメント性が増したと評判になりました。日本では2020年12月に開催のフランス映画祭2020横浜にて字幕版が、翌年3月開催の東京アニメアワードフェスティバルにて日本語吹替え版がプレミア上映されました。前作と同じリスキット配給にて2021年夏に公開予定です。

STORY

伝説の女性ガンマン カラミティ・ジェーンの子供時代の物語。12歳の少女は、家族のために髪を切り、ジーンズをはいた。

『カラミティ』は、西部開拓史上、初の女性ガンマンとして知られるマーサ・ジェーン・キャナリーの子供時代(12歳)の物語です。

マーサは家族とともに大規模な幌馬車隊で西に向けて旅を続けていました。旅の途中、父親が暴れ馬で負傷し、マーサが家長として幼い兄弟を含め、家族を守らなければならない立場になってしまいます。普通の少女であったマーサは、乗馬も、馬車の運転も経験がありません。そんなマーサは、少女であるがゆえの制約に苛立ち、家族を守り、世話するために少年の服を着て、少年のように振る舞うことを決心します。

女性は女性らしくという時代にあって、マーサの生き方は、古い慣習を大事にする旅団の面々と軋轢を生みます。更には、野獣に襲われているところを助けてくれたサムソン少尉を旅団に引き合わせたことで、マーサは大きなトラブルに巻き込まれていきます。そして…。

HIGHLIGHTS

カラミティ・ジェーン誕生の物語はこうして生まれた。

行方不明になった祖父を探しに一人北極を目指して旅立つ14歳の少女が主人公の前作『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』と同様に、本作『カラミティ』も12歳の少女の成長譚です。主人公マーサが様々な困難に立ち向かう中で周りの大人たちに影響を与え、大人たちも、いつしか少女とともに成長するという物語です。女性は女性らしくという西部開拓時代のアメリカにあって、主人公マーサは家族を支えるために髪を切り、ジーンズをはくことを決意します。生きていくために必要な乗馬、馬車の運転、投げ縄といった“男の作法”を苦勞して習得します。伝説の女性ガンマンカラミティ・ジェーンの誕生秘話でもある本作は、マーサを“ジェン

ダーレス”な生き方を選択した最初の女性として描いています。レミ・シャイエ監督はインタビューで、本作の制作過程においても男女平等を意識していたと語っています。制作スタジオのアニメーターの人数、管理職の男女比、そして給料の総額までをコントロールしていたとのこと。アニメーション制作は長期的なプロジェクトなので、女性アニメーターが制作期間中に産休を取得し、そして復職できる環境も整備されているとのこと。こうした制作環境が本作を通じて表現されている“優しさ”を生んでいるのかもしれない。

「 FILM DIRECTOR 」

監督: Rémi Chayé レミ・シャイエ

芸術学校でデッサンを学んだ後、複数のアニメーション作品の絵コンテ、レイアウト、特殊効果を担当。そしてフィリップ・ルクレク監督の「The Rain Children(仏原題 Les Enfants de la pluie)」といった長編作品のレイアウト班に加わった。2003年にはアニメーション映画学校ラ・ブードリエールに入り、短編映画3作品を制作する。その後はトム・ムア監督の『ブレンダンとケルズの秘密』の助監督兼絵コンテを担当するなど経験を積み、2015年に『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』の監督兼原画家となる。同作は2015年アヌシー国際アニメーション映画祭で長編アニメーション部門 観客賞を、東京アニメアワードフェスティバル(TAAF)にてグランプリを受賞している。

※TAAF受賞後なかなか日本公開が実現しませんでした。スタジオジブリの高畑勲監督が上映会に登壇して称賛した縁もあり、『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』のDVD/ブルーレイは“三鷹の森ジブリ美術館ライブラリー”から発売されています。



レミ・シャイエ監督作品の魅力

平面と色彩の調和が織りなす美しき世界

叶 精二 (映像研究家)

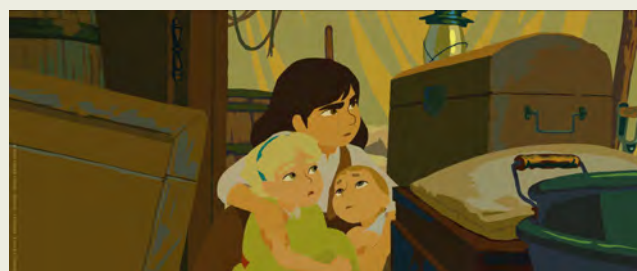
実在の人物・事件から架空の物語を創作する

カラミティ(疫病神)・ジェーン。西部開拓時代のアメリカで活躍した自由奔放な女性ガンマン。その容姿は束ねた金髪に碧眼で、アングロサクソン系の美女に見える。こうしたイメージは、ミュージカル映画『カラミティ・ジェーン』(1953年)でドリス・デイが彼女を演じた頃から変わらない。『トイ・ストーリー』シリーズに登場するカウガール人形「ジェシー」もカラミティがモデルらしく、やはり金髪碧眼だ。しかし、本作のヒロイン「マーサ・ジェーン・キャナリー」のキャラクターデザインは全く違う。茶色の髪に太い眉毛、丸い鼻は、どちらかと言えばヒスパニック系に見える。残された写真を見る限り、従来のイメージより本作の方が本人に近い。実在の場所・人物・事件を基にオリジナルを創作するレミ・シャイエ監督のスタイルは、前作『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん』と共通する。

『ロング・ウェイ・ノース』の起点は、脚本家クレール・パオレッティ(Claire Paoletti)の発案による「祖父の汚名をそそぐために旅立つロシア貴族の少女の物語」であったと言う。シャイエ監督とパオレッティは、イギリスの冒険家アーネスト・シャクルトンが率いた「エンデュランス号の南極漂流」(1914～1916年)をヒントに舞台を「Tout en haut du monde(地球のてっぺん)」である北極に改変。脚本にパトリシア・ヴァレックス(Patricia Valeix)、ファブリス・ドゥ・コスティル(Fabrice de Costil)を加え、砕氷船の遭難と奇跡的帰還という大胆かつ劇的なシナリオへと再構築した。一方、本作のサブタイトルは「une enfance de Martha Jane Cannary(マーサ・ジェーン・キャナリーの子供時代)」。カラミティ本人は自己演出の虚言癖があり真偽不明の経歴が多く、特に幼少期は謎が多い。シャイエ監督は脚本の

サンドラ・トセロ(Sandra Tosello)、ファブリス・ドゥ・コスティルと伝記『The Life and Legends of Calamity Jane』(Richard W. Etulain著、日本語版なし)を基に史実を調査。カラミティは「幼少期に一家でミズーリ州からモンタナ州まで楽しい旅をした」と語っているが、その詳細は分かっていない。そこで年代を1863年(11歳)とし、舞台をワイオミング州(ホットスプリング郡)からアイダホ州へ向かう「オレゴン・トレイル」に設定。母の死後、父が幌馬車隊に加わり移転先まで旅をする物語とした。当時は南北戦争の最中である。サムソン少尉や大佐が属する「第3騎兵隊」はブルーの軍服から北軍と思われる。

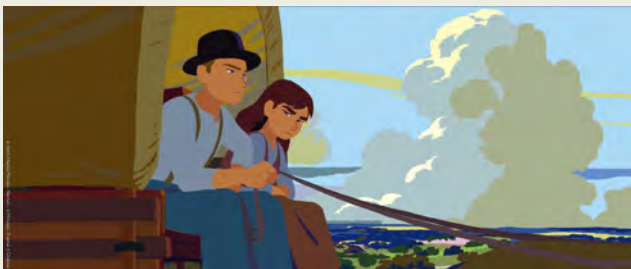
前作との共通点は設定や舞台だけではない。男性社会の中で苦しみながら働き、めげずに旅を続ける中で自立し、やがてリーダーシップを発揮するヒロインの生き様。多数の登場人物がそれぞれ事情を抱えており、打倒すべき悪人が存在しないという民衆感。健気に寄り添う愛らしい犬の存在。前作の白熊、本作のビューマ・熊・蛇などあくまでリアルな生物描写。どれもが、信頼・勇気・決断といった普遍的なテーマを構成する重要な要素となっている。





簡素なキャラクターと空間の絵画的色彩設計

シャイエ監督作品の最大の特徴は、色面で塗り分けられたキャラクターと背景が一体となった画面の美しさである。キャラクターに輪郭線はなく、色面の顔に眼・鼻・口などの極めて少ない線を上描きした簡素な造形だ。線描の過密化によって質感や装飾性を高めようという発想とは真逆のスタイルだ。元々『ロング・ウェイ・ノース』のために開発された様式であったが、本作では一層の洗練と同時に照明・配色などに複雑な進化が見られる。前作でも作画監督を務めたリアン=チョー・ハン(Liane-Cho Han)による的確かつ繊細なアニメーションと高低差を活かしたレイアウトが作品の基礎を支えている。



とりわけ自然の風景描写は圧巻である。ピンクやパープルで陰影を施された雲、ブルー・グレー・グリーンに混在する平原の草むら、青く明るい夜空。それらの空間は平面的でありながら深い広がりを持ち、湿度や匂いまで感じられそうだ。透明な装いを捨て、深く水色に塗られた川の水飛沫からちゃんと冷たさが伝わって来る。情報過多の写実的3DCGのVR映像とは根本的に異なる、簡潔で調和の取れた色面から喚起される「感覚的臨場感」がそこに在る。前作に続き色彩監督を務めたパトリス・スオウ(Patrice Suau)は、後期印象派を代表する画家ポール・ゴーギャンとその教えを起点として展開した「ナビ(予言者)派」、その後継運動である

「フォービズム(野獣派)」の色調を参考にしたと言う。19世紀末にヨーロッパで始まったこれらの新たな絵画運動は、人の心理や感覚を写実を廃した色彩で表現しようと試みた。そして、それらの運動は浮世絵を代表とするジャポニスムの強い影響を受けていた。その遺産子を受け継ぎ、未だ線描の漫画や「アニメ」を愛する我々日本人には、本作に親和性を感じる根拠がある筈だ。

近年EU諸国を中心に、幾多の革新的長編アニメーションが生まれている。『ディリリとパリの時間旅行』のミッシェル・オスロ監督も、『ウルフウォーカー』のトム・ムーア監督も、『手をなくした少女』のセバスチャン・ローデンバック監督も、そしてシャイエ監督とそのスタッフも、手描きにこだわる日本(特に宮崎駿・高畑勲両監督)の影響を受け、写実とは異なる作画様式の導入に挑んできた。それらはアニメーションの美術的価値を押し上げる新たなムーヴメントと言い換えても良い。1世紀以上の時を隔て、写実から心象へと転換した美術史が繰り返されているように思えてならない。

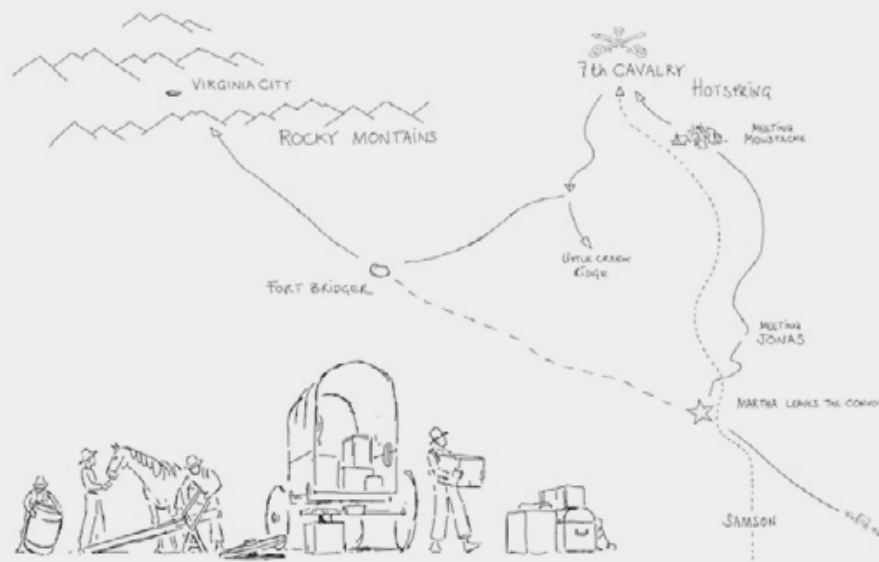
1890年、ナビ派の代表的画家・理論家であるモーリス・ドニは論文「新伝統主義の定義」にこう記した。「絵画が、軍馬や裸婦や何らかの逸話である以前に、本質的に、ある順序で集められた色彩で覆われた平坦な表面であることを、思い起こすべきである」。シャイエ監督の作品群からは、ドニの提言に通じる誇りと信念を感じる。美しい色彩で塗り分けられた豊かな空間。その中に溶け込み、存分に躍動するキャラクターたち。眼に優しい平面の絵がスクリーンを通じて語りかけてくる。その心地よさと驚きこそ、2Dアニメーションの本質の魅力であり、揺るぎない優位性である。



レミ・シャイエ監督による
制作NOTE

西部開拓をテーマに“今”を描く

映画の冒頭、観客の目の前には西部の広大な平原と空が開ける。やがてゴツゴツとした危険な岩山が姿を現し、近づくにつれて大きくそびえ立つ。旅団の一行は、この山々を越えなければならない。この旅団は小さな共同体で、村そのもの。言うなれば「車輪に乗った村」である。彼らはこの道の先により良い未来があると信じ、新天地を目指して進み続ける。



ここに1人の12歳の少女がいる。彼女は自分の居場所に不満もなければ、反抗的でもない。開拓者の旅団の中で、少女たちは皆、料理や洗濯をし、弟妹の面倒を見る。そしていつも馬車の近くを離れない。マーサ・ジェーンも、それを当たり前のこととして受け入れていた。

しかし、一度自由を知った彼女は、元々の豪胆な性格も相まって、共同体の常識の枠には収まらなくなっていく。様々な出会いと経験を糧に、マーサは自身のあり方を作り上げていく。彼女のとてつもなく自由な精神は、時代の100年先をいくものだ。



「僕がピンクのドレスを着たら、男の子じゃなくなるの？」
「女の子はズボンをはき、髪の毛を短くして、自由に生きていいのか？」

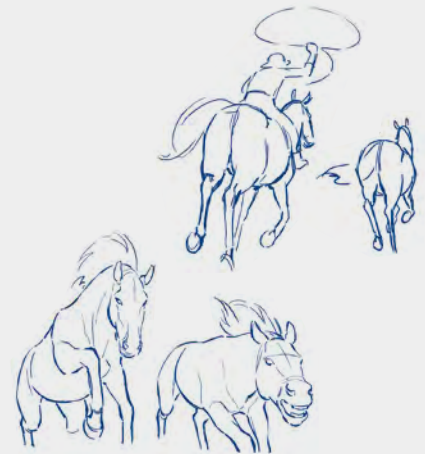
僕らはこの問いを、子供たちに投げかけたい。

実際のカラミティ・ジェーンは、他人に書かせた自伝を売ったり、ショーに出て自分自身の役を演じたりしているが、彼女が語る登場人物やストーリーも、事実にもかかわらず脚色されたものだったという。それもあって、この映画でもマーサをトム・ソーヤ風の嘘つきにした。だが嘘と言っても、それは生き延びるための知恵で、窮地に追い込まれた時や、惨めさを払拭するためにつく嘘である。

この映画では、我々は登場人物を中心に、事件を作り、独自のフィクションを構築しながら、西部開拓時代と同じぐらい「今」を感じられる物語を目指した。それぞれの人物の複雑な面を描き、悪役にも光の部分を持たせた。

絵については、シンプルさを追求した。スクリーンに広がる壮大な風景の中、力強い形と色彩で人物を描いた。音楽はフロレンシア・ディ・コンシリオが担当。ブルーグラス※を織り交ぜ、オーケストラが演奏している。彼らの音楽がこの映画を存分に引き立ててくれた。

※ ブルーグラスは、スコッチ・アイリッシュの伝承音楽をベースにしたアコースティック音楽。



フロレンシア・ディ・コンシリオ (Florencia Di Concilio)

『カラミティ』の音楽は、リアルでありながら、空想世界を音で再構築したものでなければなりません。それと同時に、ストーリー、脚本、およびアニメーションの作風に合っていないではなりません。そこで、このサウンドトラックに、ブルーグラスのバンドに参加してもらいました(バンジョー、ギター、マンドリン、ヴァイオリン、コントラバス)。実験的な曲もあれば、定番のオーケストラにブルーグラスを入れた曲もあります。すべてを、フレッシュで繊細な子供の視点で、叙情的に作りました。

※作曲家フロレンシア・ディ・コンシリオは、制作の初期段階から関わり、映画の進行とともに音楽を完成させていきました。合計38分間になった音楽は全曲この映画のためのオリジナル曲です。※以下のサイトでこの映画のサウンドトラックの一部が試聴できます。

<http://22dmusic.com/playlist/Calamity>

本当の「強さ」を持つ2人の女性キャラクター

この映画で最も印象深い役を演じたのはサロメ・ブルヴァン(マーサ・ジェーン役)とアレクサンドラ・ラミー(ムスタッシュ役)の2人だ。

ムスタッシュ夫人は、強い信念を持った女性で、唯一の本当に「強い」大人として登場し、やがて主人公マーサのメンターの存在となる。マーサに、女性である自分を引き受けることを教えたのも彼女である。男性社会で生きるからといって、男と同化しなければならないというわけではない。「自分自身であれ」、それがこの映画のメッセージである。レミ・シャイエはこう強調する——「カラミティ・ジェーンは、男の子のような女の子ではない。素晴らしい女の子なんだ」と。サロメ・ブルヴァンとアレクサンドラ・ラミーが演じたこの2人の存在は、女性解放と自立へのメッセージを秘めている。



(右) サロメ・ブルヴァン (左) アレクサンドラ・ラミー



マーサ・ジェーン

CV: サロメ・ブルヴァン



ムスタッシュ

CV: アレクサンドラ・ラミー





美術チーム

『カラミティ』は『ロング・ウェイ・ノース』と同じチームが、キャラクターを輪郭線で囲わず、ベタ塗りの色彩と光と影によって人物と背景を描き分けるという独自のスタイルを更に掘り下げ、よりリアルな表現を実現した作品である。レミ・シャイエが率いるこのチームは、カラー担当パトリス・スオウ、レイアウトと背景担当エディーヌ・ノエル、絵コンテとキャラクター・アニメーション担当のリアン=チョー・ハンとマイリス・ヴァラッド、モンタージュ担当ベンジャマン・マスーブルが中心となっている。『カラミティ』は馬が駆け巡り、アクションもふんだんに織り込まれた西部劇であり、1カットあたりの平均人数は2.5人。開拓者たちが多く登場するシーンでは20人に上る箇所もある。

※フランスでは『カラミティ』の美しいシーンの数々や制作過程をふんだんに掲載したアートブック「the art of Calamity」(270×250 mm、ハードカバー、222ページ)が出版されています。日本でも6月中旬にリスキットより発売の予定です。



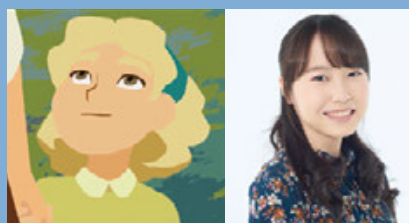
VOICE ACTORS

日本語吹替え版

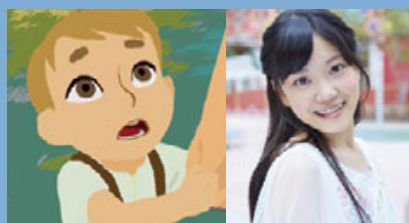
マーサ・ジェーン

CV 福山あさき

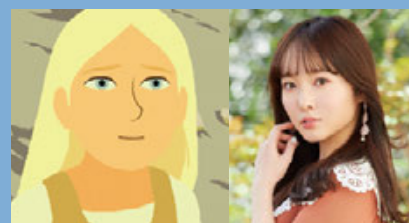
伝説の女性ガンマン、カラミティ(疫病神)・ジェーンの少女時代。困難に立ち向かいながら自立していく主人公マーサ・ジェーンを演じるのは、Youtuber・モデルとしても活躍中の福山あさき。昨年公開のルーマニア・フランス共同制作アニメーション『マロナの幻想的な物語り』で演じた、“通行人”からの大抜擢となります。少女から芯の強い大人の女性への変貌を新人ならではの思い切った表現で演じています。



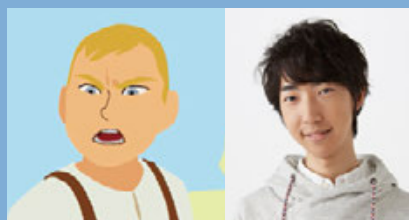
マーサの妹 レナ
CV 松永あかね



マーサの弟 エリージャ
CV 木野日菜



マーサの親友 イヴ
CV 木戸衣吹



マーサのライバル イーサン
CV 島山航輔



アブラハム(旅団長)
CV 杉田智和



イヴの父
CV 上田耀司



マーサの妹レナ役には「アイカツフレンズ!」の松永あかね、幼い弟エリージャには「あそびあそばせ」の木野日菜が配られました。更に、マーサの親友イヴに木戸衣吹、ライバルのイーサンに島山航輔といった新進気鋭の若手を据え、イーサン之父でマーサを追いつめる旅団長アブラハム役杉田智和、イヴ之父役の上田耀司など人気ベテラン声優が脇を固めています。また浅水健太郎、成澤卓、前内孝文といった『ロング・ウェイ・ノース 地球のてっぺん!』でおなじみの声優陣も顔を揃え、期待感の高まる布陣となっています。

MORE

物語後半の大事なバディ(仲間)役には『マロナ〜』の端役に起用された際、そのコミカルな表現力を評価され林瑞貴が抜擢されました。福山あさき、林瑞貴両名の“端役から大抜擢された”新人による珍道中の掛け合いシーンも見逃せないポイントとなっています。

MESSAGE

(1. 役どころを演じての感想 2. ファンへのメッセージ/好きなシーン)



マーサ・ジェーン役 福山あさき

1. マーサは自分の気持ちに素直で、いい意味でも悪い意味でも真っ直ぐな女の子でした。すごく負けず嫌いで、一度自分がやると決めたら周りが何を言ってもやり通そうとする性格は、自分と重なる部分があって演じていて楽しかったです。

2. マーサは活発的に行動するが故に、周りから煙たがられて疫病神扱いされてしまうんですけど、何があっても自分を信じて進んでいく姿は見ていて元気をもらえると思います。旅を通してたくましく成長していくマーサを是非見ていただきたいです。



マーサの妹 レナ役 松永あかね

1. レナ・キャナリーを演じさせていただきました。レナは怒ったり笑ったりコロコロ表情が変わるので、演じていて楽しかったです。妹であることや好奇心が強いことなどレナと自分の共通点が多く、自分の幼い頃を思い出しながら演じました。

2. マーサの生き方からとても勇気をもらえる作品です。私自身「カラミティ」を観て、こんな生き方もかっこいい…と感じました。色づかいや音楽で、さらに世界に入り込めました。マーサがどのように行動し成長していくのか、気になった方は是非ご覧ください。



マーサの弟 エリージャ役 木野日菜

1. エリージャは作品の中でも特に小さい男の子だったので、その歳らしいハツラツさや素直さを大切に演じさせていただきました。苦手な食べ物には食べたくない! 疲れたから抱っこして欲しい! あまり深く考えず、思った事はそのまま言葉や行動に出してしまうエリージャのことが、演じながらとても愛おしくなりました。

2. 好きな場面は沢山あるのですが、やはりマーサが家族と一緒に過ごしているところが、私の中で特に思い出深いです。物語が本格的に動く前のシーンですが、このシーンがあるからこそ、女性であるマーサのカッコ良さが引き立つのだと思います。



マーサの親友 イヴ役 木戸衣吹

1. 私が演じるイヴは、主人公マーサの数少ない理解者で親友です。この作品の中では一番おしとやかで、いわゆる「女性らしい」キャラクターなのではないかと思っています。「女性は女性らしくあらねばならない」という周囲の言いつけに逆らうマーサを戸惑いながらも応援する心の優しい女の子です。

2. この作品には「自分らしく生きる」という大切なメッセージが込められていると思います。ありのままの自分でいることの大切さ、家族、仲間の絆や愛などいろんなものを感じていただけたら幸いです。音楽もとても素敵なのでそこにも注目しながら楽しんでいただけたらと思います。



マーサのライバル イーサン役 島山航輔

1. イーサンを演じるにあたっては、単に「悪いヤツ」、「いやなヤツ」で終わらないよう、彼自身の脆さや、ある種のかわいらしさのようなものも表現できればいいなと思い、意識して収録に臨みました。また、個人的なことになりますが、元々吹替えを志望してこの世界に入ったので、今回初めて吹替え作品に参加させて頂きとても嬉しかったのを覚えています…!

2. マーサたちの幌馬車を引っ張るイーサンと、マーサが御者台の上で会話するシーンは、個人的に好きな場面です。マーサの自立心と好奇心、イーサンの傲岸不遜さ、そして2人の「幼馴染み感」が滲み出ている、短い場面ではありますが印象的なおもしろさがありました。牧歌的ながらも、自然界への畏敬の念や、マーサが巡り会う様々な人々との一期一会が丁寧に描かれた今作。多様な要素をふんだんに含んでいるので、一瞬一瞬を飽きることなく楽しみたいだけだと思います。小さな女の子が屈することなく成長していくその過程を、ぜひ、劇場でお確かめください!



アブラハム(旅団長)役 杉田智和

1. 生と死が隣り合わせの生活を送る団長のリーダーとして、厳しさの中に複雑な意味を持たせるように意識し、どうしても息子には甘くなる部分で人らしさを忘れないようにしました。

2. 英雄は自身で英雄と名乗らず、自らの生き様で示す。この物語に込められた想いが伝われば幸いです。



イヴの父役 上田耀司

1. 前作「ロング・ウェイ・ノース」の時から注目していたレミ・シャイエ監督の作品に関われて光栄です。イヴの父は優しく面倒見の良い人ですが、当時の長旅は命懸け。その辺りの彼の苦悩を感じました。

2. マーサ・ジェーンが馬の訓練をする場面があるのですが、孤独と不安をはね除けるように夢中で生きる術を手にしようとする姿に心打たれます。そして、星空の表現が素晴らしい。劇場のスクリーンで見たらきっと素敵だと思います。

ヒロイン
平原の女王 カラミティ・ジェーン [1856年(または1852年)5月1日 - 1903年8月1日]

アメリカ西部開拓時代の女性ガンマンであり、「平原の女王」と呼ばれた彼女は、ワイルド・ビル・ヒコックの親友として知られ、軍の斥候でもありました。

史実では1866年、彼女が14歳のとき、父ロバートが家族全員を連れて幌馬車でモンタナ州バージニア・シティへ引越したとあり(母シャーロットは重い肺炎にかかり道中で死亡)、本作の脚本は、その時代をベースに書かれています。カスター将軍の下、軍服を着て男装しネイティブアメリカンとの戦いに臨むなど、その生涯は波乱万丈で、幾度も映画化されています。最近ではゲームのキャラクターとしても登場するなど、カラミティ・ジェーンは時代を超えたヒロインとして存在し続けています。

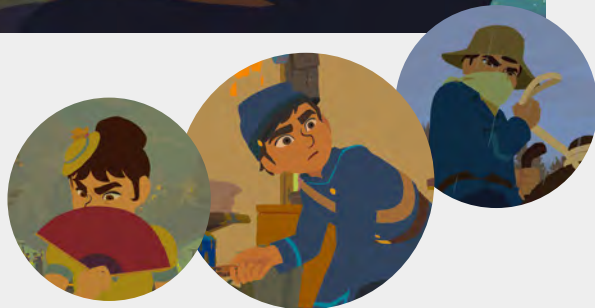


マーサは髪を切り、ジーンズをはいた。 そのほうが動きやすかったから。

新天地を求めて西を目指す幌馬車隊。そこでは何よりも、ルールに従うことが重視される。しかし、怪我を負った父に代わって家族を支えるマーサにとっては、それは問題ではなかった。目の前の困難を乗り越えるために必要ならば、彼女は慣習など気にしない。

一方で、スカート脱ぎ、少年のように自由に駆け回っていても、男の子になりたいわけではない。マーサは一貫して、自分が女であることに誇りを持っている。実在のカラミティ・ジェーンは、男性の服しか着ていなかったと思われがちだが、実はコロコロと服装を変えていたという。

映画のラストで、マーサは幌馬車隊の案内役(斥候)となる。颯爽と馬を駆るマーサは、オレゴンへの道を示すと同時に、女性の新しいあり方をも示しているのかもしれない。



CAST & STAFF

日本語吹替版

マーサ・ジェーン	福山あさき	サムソン	恵山渉一	塩尻浩規	西村耕平
アブラハム	杉田智和	ジョナス	林瑞貴	金子隼人	真白健太郎
レナ	松永あかね	ムスタッシュ	南條ひかる	関野渉	八十竜一
エリージャ	木野日菜	大佐	中山祥徳	田口尚明	前内孝文
ロバート	常盤昌平	カーソン	成澤卓	徳森圭輔	京雅
イーサン	畠山航輔	保安官	川上晃二		
イヴ	木戸衣吹	軍服の男	森嶋秀太		
イヴの父	上田耀司	パイプの男	蓮岳大	演出	安藤直子
エスター	堂坂有希	ルイ	中村精道	録音・調整	水本大介
ベラ	渡辺はるか	丸顔の男	浅水健太郎	キャストイング	金子秋波(クレール)
みつあみ少女	堀越せな	少女B	夜道雪	制作・配給	リスケット
少女A	武藤志織				

2021年夏より、順次全国公開

🌐 calamity.info 🐦 @calamity_movie

タイトル: CALAMITY カラミティ 監督: Rémi Chayé レミ・シャイエ 原題: Calamity, une enfance de Martha Jane Cannary
英語題名: Calamity, a childhood of Martha Jane Cannary © 2020 Maybe Movies ,Nørlum .2 Minutes .France 3 Cinéma
2020年 | フランス・デンマーク | フランス語 | 日本語字幕 | 日本語吹替え | DCP | カラー | シネマスコープ | 82分

写真、ロゴ、報道資料のデータは riskit.jp のHP プレスキットからダウンロードいただけます (https://riskit.jp/press_calamity.html)

取材、作品についての お問い合わせ先 → 【宣伝協力】プリマステラ 貝塚 Tel:090-0418-1101 Mail:primastella316@gmail.com
【配給】株式会社リスケット 金子 Tel:047-314-5316/090-7414-5875 Mail:gaku0615@gmail.com